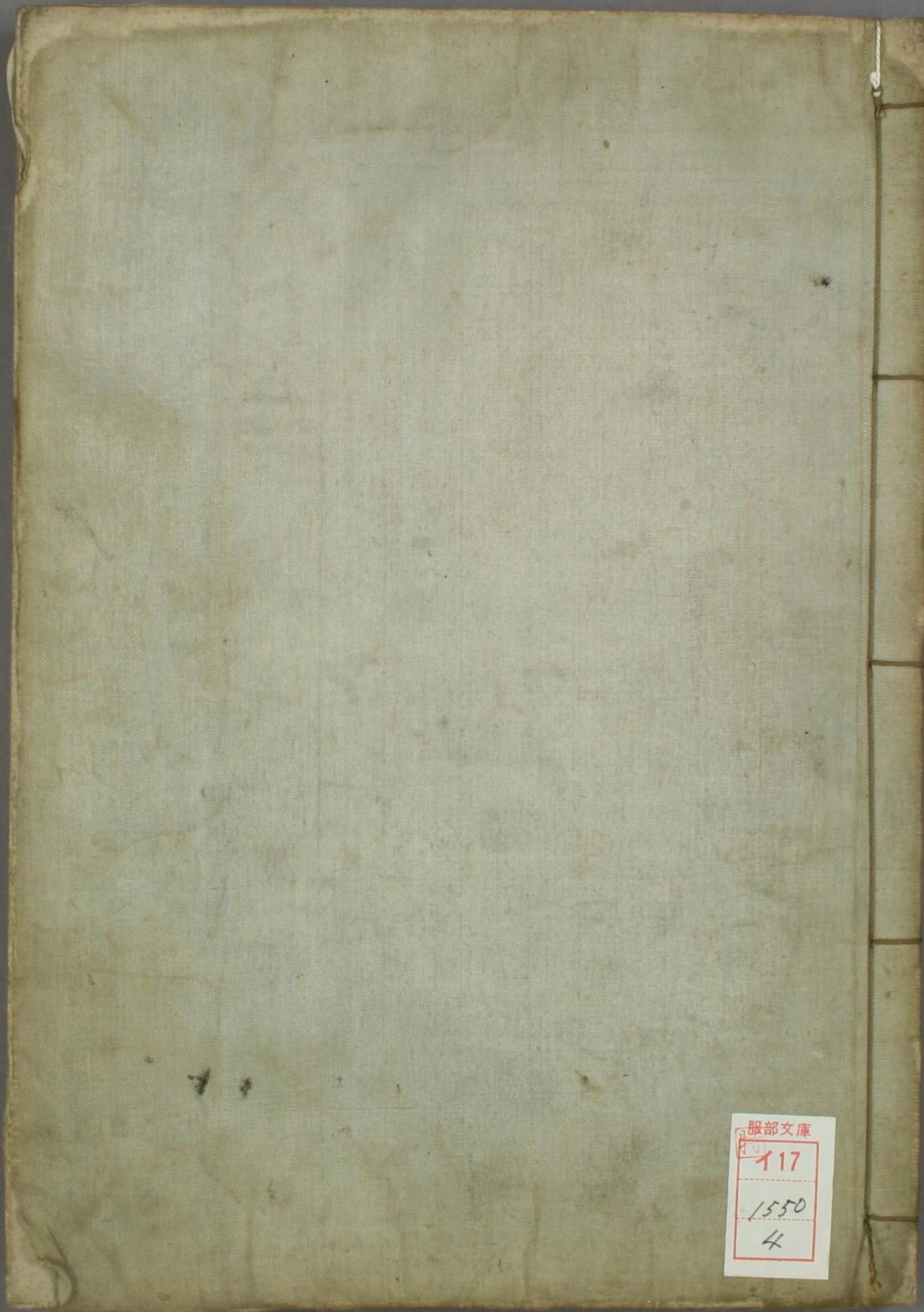


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30

JAPAN

TAMIA



117
1550
4

紀伊國名所圖會卷三目錄

耳蕨の製

淹 烟

中王子

音無の附

印

雄のム

雄の岸

中ム

紀乃園守

ちうら雪屋

白鳥神社

山口王子

音無の附

紀の園跡

低園寺

法教寺

紀乃園守

紀の園跡

坂上氏宅

小野寺

音無の附

力侍神社

川邊王子

土屋神社

音無の附

楠奉社

八幡社

山口驛舍

音無の附

八王子社

大屋都比賣社

午頭天王社

音無の附

總社明神

中村王子社

永山寺

音無の附

星頭神社

十五社明神社

水德中少支那

音無の附

高良神社

府中神社

田井丸石室

音無の附

津久寺

齒觀音堂

松讚寺

音無の附

田屋助支那

八幡宮

廣安堂

高橋神社

參上寺四路

正法寺

天之神社



周易圖書印

丹生神社
奉為寺
千壽院
參天崖
真川助美畠
伊勢神社
園部神社
伏見隱山墓
伏見吉社
總社明神
二所堂
王門
法華堂
光明堂
光明七瀬坂
藏法藏
役行公塔
桜井
一樂寺
荀公無處塔
九頭神社
弁財天社
明光寺
淨永寺
六所権現
圓明院
南國山天目寺
圓明禪寺
八王子社
皇子社
兒の巣
直石茶店圖
金剛山玉社
松林堂
經塚山
羽尾陵
天台大師像
喫茶
伊久姬社
藤原家定

砂糖

唐以前まことに支那に之があることをもてた文字の時からありて
外國より献さる所則其法をもつて始くこのねば製る
由老竹菴筆記を見えてうか東方住音はあらふきだ
當府城の西たる倭雜賀屋内とて、小雜賀は東の所
製法ははくとて、もとて山田在田郡小豆島村のうち
雜賀屋新田とて、田畠小甘蔗とうゑくとて、生糸を

くぼひのふ

國君の間ある御所をかぢるを諸國の事ともうの事
雜賀屋が何處うけてるのかたうとかや宝國益を物る
の内廣大ありとづべ

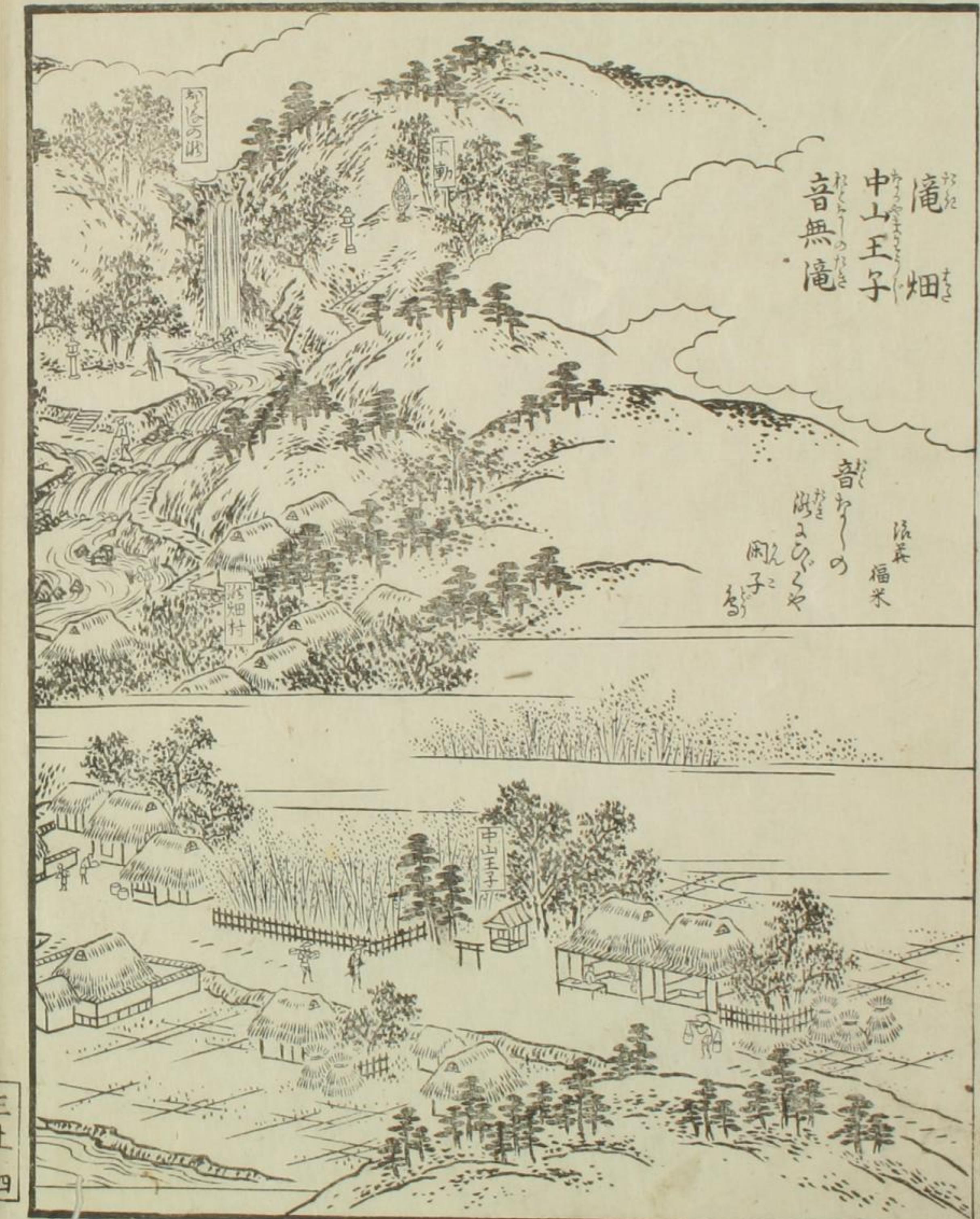
中山王宇社 山室庄浦畑村より小祠

家御の御所を遡河紀を建仁元年十月自拂曉を遡先日達一ノ瀬王宇又粉及中後
藏王源次參宇羽目王子次參中山王宇とて○平家わざりに盛徳院の余言を
と拝候の事のうちをの申とおじて馬と御坐して御坐せばよ臨でだつるところの神社の
ところをあり是と玉子を拾うるのみ然院併せ御子を准へまうての各なるべ一○定

音ナリの瀧
彦ナリ此の水資源は雄の山より出く流くたり、谷川あり其
其山ナリ下水六尺、強上木翠岩擇りて流と激
て頗也塗の瀧あり、旱歲とて渴渴とて、彦樹背叢にて
渴をあつて水常に満むる
トヨタニ取之の際、まだて山の山より
月章紀伊國み出真云々甲寅自雄山道還日根乃宮云々峯
中記云々嘆歌隣下 麻多輪 嘆歌庵

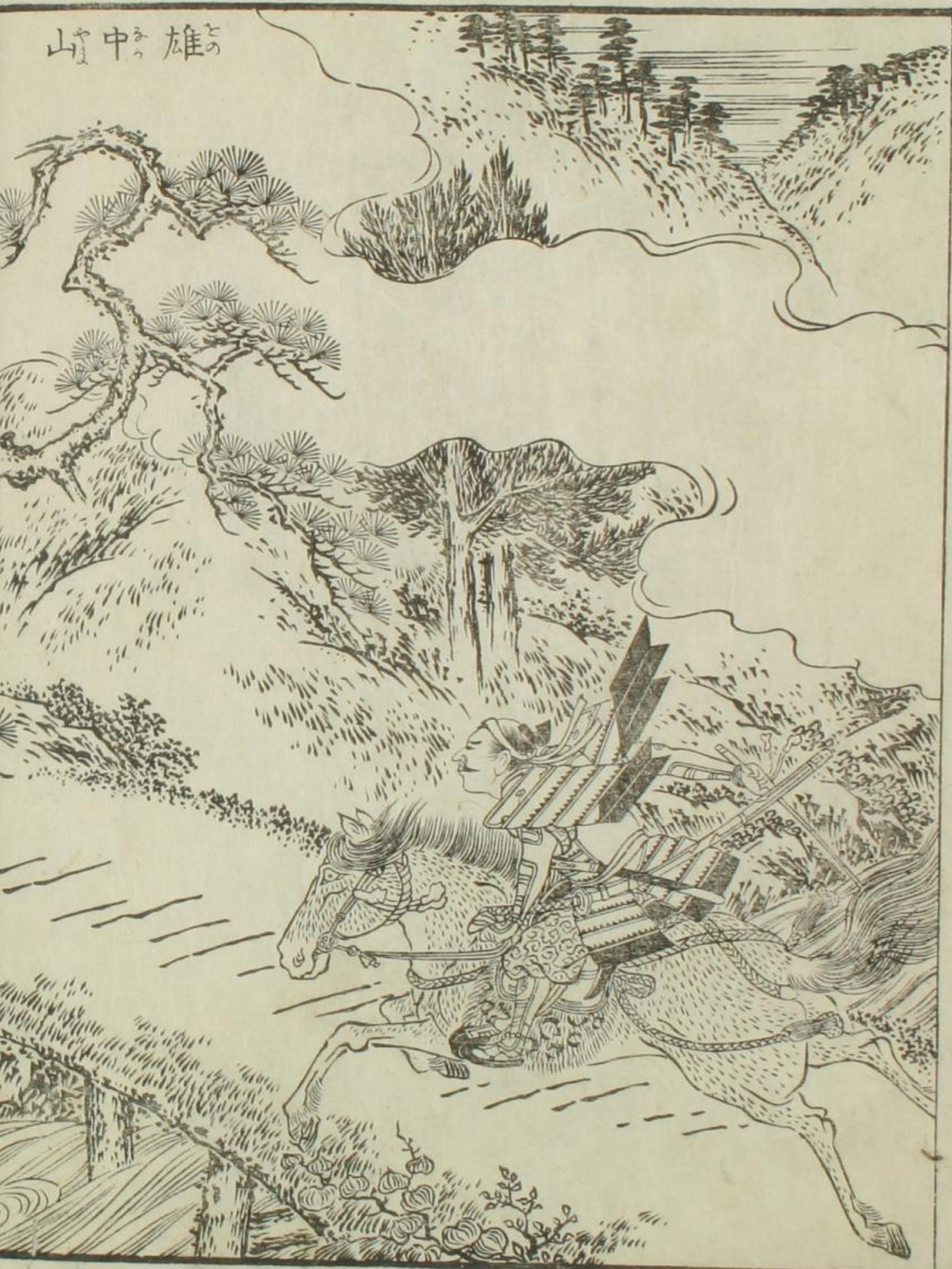
雄

の山
月章紀伊國み出真云々甲寅自雄山道還日根乃宮云々峯
中記云々嘆歌隣下 麻多輪 嘆歌庵





平
ま
ま
ま
中
ま
ま
ふ
出



紀の國趾

又日鳥の國もつうれ泉みより通玉へるる雄の山にありて南の原うち山口内教體寺大徳二年國塞附人と敏とあらび其廢豆一岁ハ今考ヘテ

うかわ浴吹上巻

あらの君は人の底ひまあるゆ一水のうちとこをりて見えあらがまく。國の下にまでそむかにあけの底ひまもくしてなまかまく。ゆまよとひまをこまあらがまく。そぞうだらどもすきてぞうのまひしてぞうきく。あらゆのなこともなことをひそむ、あらせてひきびりそう。やとあらかごひのふともこまく。ゆあらじて、まをひそむのまう。がとおまくようぞう。すなまとも。これとがまつあかーもひく。ほくのうほくれてぞうだらとあら。そでせんぐのくめくまうけーたすく。ましむだらよちむのれくらほくとめんよもゆうのまくあらがまく。がくとく。りのあらがまく。うけもおせのトれをひ一かみのちうけくたてまく。まくかく。きぬひの却くよみねつとつたまく。まく。縦どととくうとのゆーううたまく。ましもる。まくふさやごどりとあたこまよまく。

名トアヒトアヒトモニ。都名ニモニ。かく底きくしにすて

アーベニニえうたわと都鳥口にのこなづふまくうれ。れ

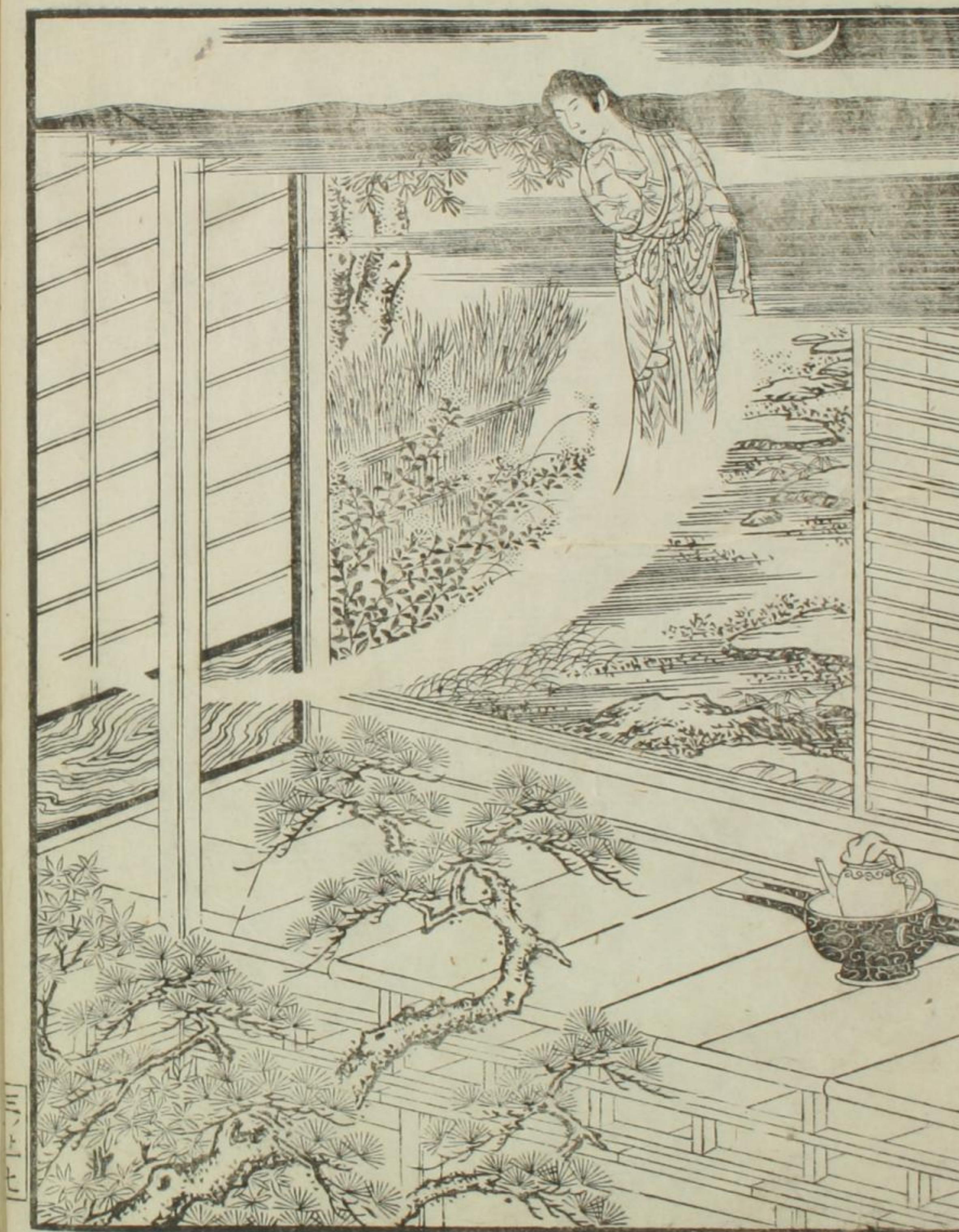
アーベニナミアミテロコニウモ流の川をなやく。ゆにすり

リ人の心もとくねみまくへてとくまろくひをかう。アーベの君

アーベラル波の川の脚は脚もつそくこぬまわく。く那

カニ祭る。まーとくアヒトモニ。叶はれ。まのぐりが付のアヒトモニ。

○袖中抄みたはくらとん紀儀史の風去派と考るに弓のと先を立とく
そまた紀伊の又雄の口と守が持弓などりとく
○今昔物語よみ金ひむ。 紀伊五氏。佐良男。あうその妻。うちうべへ
猪の首。あらまめ支。金。猪の首。うらあ。付。まよと。く
猪の首。あらまめ。猪の首。但か。の後。金。猪の首。あら付。まよと。く
とくとく。金。あらまめ。男。猪の首。猪の首。あら付。まよと。く
引。一張。弓。の上。首。金。猪の首。金。猪の首。あら付。まよと。く
猪の首。金。猪の首。金。猪の首。金。猪の首。金。猪の首。金。猪の首。金。猪の首。金。
だ。ち。み。ら。成。く。立。く。ほ。の。意。し。と。く。も。う。か。う。て。猪。と。か.
あ。く。して。ゆ。と。付。あ。る。あ。く。と。其。う。に。づ。く。自。に。鳥。と。猪。く。と。い。か。て。猪。と。
て。山。け。ば。内。か。あ。く。く。れ。も。ひ。て。猪。よ。き。れ。ふ。石。草。那。よ。ひ。う。て。猪。と。
の。が。よ。う。り。て。う。り。因。と。と。そ。た。も。あ。く。ま。う。と。と。そ。ひ。よ。る。と。
○又。抄。ト。し。室。兵。内。が。未。ノ。て。大。筋。の。筋。り。段。入。主。の。櫻。兵。用。金。の。主。に。下。る。
は。が。行。け。不。の。立。兵。と。く。て。川。を。ワ。不。と。く。も。標。の。あ。く。と。く。と。く。生。法。か。よ。
と。御。貢。ア。く。玉。更。よ。ス。セ。以。前。か。本。村。村。行。本。村。村。行。本。村。村。行。本。村。村。行。本。村。村。行。



あるは家こそ由緒あるものありもと大河の玉を川下りて流れとりよし地よりのをと
のえんあるもまことしゆくばや

万葉

吉 背子之跡履求追土者本乃閑守作留鷗

全 村

支本 れもよめなりもむうねりひ紀の川上の角のりの宮

鴨長明

玉吟

これらへす東のうの白鳥と絶の川ゆそり立石日出

俊 賴

家集

あしづ紀の閑守よもんゆそりゆあやすくあた

藤原光經

長秋流藻

引としるこをみき紙と一紀の室守うらうすなに

俊 成

壬二

引とめよ紀の閑守うたつう春のつれどももやうすせ

家 隆

室守の紙

室守の紙子りひだらかうゆう

白鳥神社

湯谷谷村の小寺半山の西子にありあまねえする白鳥といひ

其 角

山口王子

其二引とめよ紀の閑守うたつう春のつれどももやうすせ

其 角

白鳥山小野寺

日向又幸紀より

其 角

本尊地藏菩薩

立像長天子守護神左守○小院

其 角

什賓小年塔婆

作小町自筆の短冊

其 角

小町

不老小町の年塔婆

其 角

○什賓小年塔婆 小町の本像

はまれてたゞ金に木あり

さりありたりとも

さういふが並明かる考合それば小町さうり業平よりひめのアリてあり

言く白方代え一圓より一人で采女と内裏へおせりとあり

あ後すへ小町と底まつるりの六千餘人ありとありは采女と后町のうちふねじ先

たまひまく小町と底まつるりあり其人くの仕止と止く左下より

まつる草と下へ小町塚と底まつとからぬねとほくに小町塚と下り

尾根の弓は二三所あり志満をうきて小町と二人とれりよりがれる足跡足跡へたと

ハ室方れはまく人の足えんのうと業平の半身の袖とよひし出羽の郡司小町

良実う娘の小町すり高階大門の金たまふ壯りは慢漫とありに衰つて日被破綻

通よきまく小町とくの常陸玉王造立がまむすあおりかくへきは代の外とある

あるのうちも良実が娘の小町へ是へてわきもとぶれ道へ振り各くとて一人の

理うはまくのくのくの寺の後もうととがく小町の歴跡歴跡まで日をと普

通よきまく小町とくの常陸玉王造立がまむすあおりかくへきは代の外とある

あるのうちも良実が娘の小町へ是へてわきもとぶれ道へ振り各くとて一人の

山口庄産神社

谷村より

○祭る神

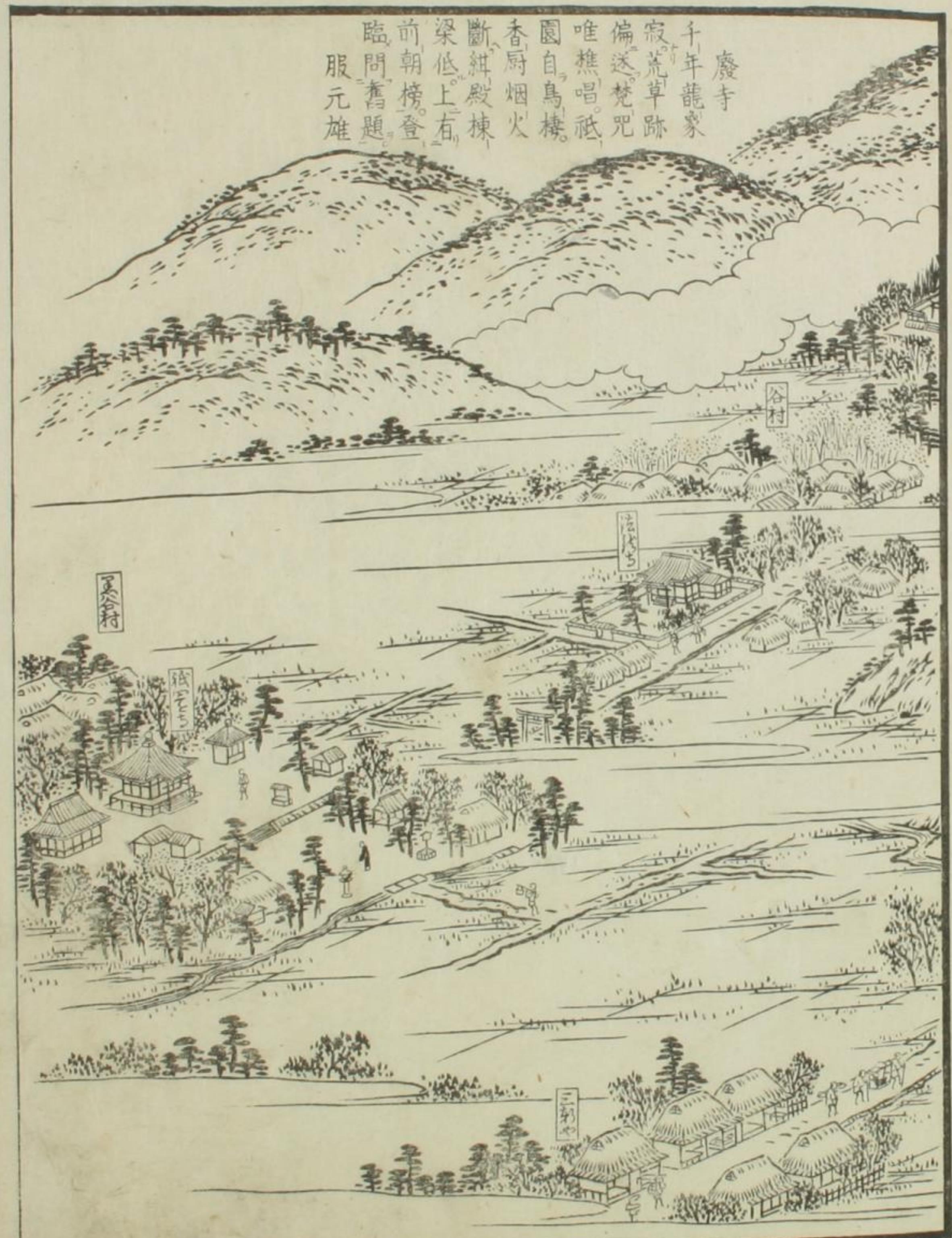
仲戸山玉七ねねにけたれ候久津ヒ素神等の

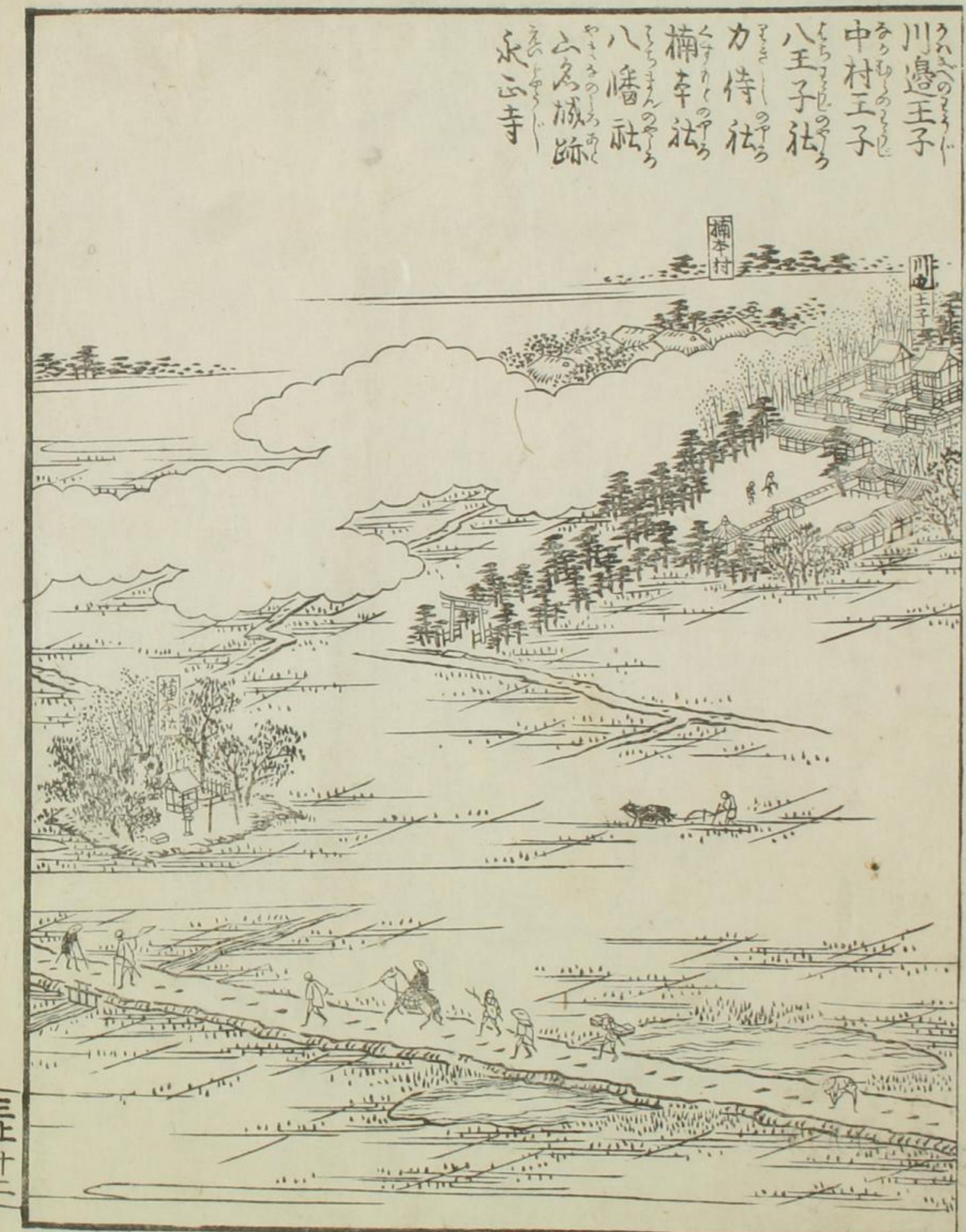
三座みて山内十ヶ村の產神たちと毎歳九月廿二日祭

れあり

社司の語によれば雄の靈鳥ありて境内をあるところあるが本と喰め

よく若とあかてくふとく神のみうち庄内の村長十人月乃





命云く。一村の産神にて毎年九月十日奉祀あり。当社の地面ばかりと樟樹の株より自然に生

一叢の社とさるなり其様今猶存して周り三十步ありて密ふ数千本の古木うりたん云ひて此

此地大蜘蛛ありて此捕木より山へ巣をもう人民をうやきセレバ天四年中田村ぬ事に動て是

を退治せしめふひに其を伐木と伐倒せしも

八王子ノ社 水穂村 祭る神曆神八將軍 九月十九日 一村の産神にて毎歳

八幡宮 日村小字 有り ○ 往昔基督教太師根本草創の御寺の内より法神と証言あり。是則也

山名修理を支義理墨跡に下おり西ヨリ是より西ヨリは水年中蟹田と云ひ又是より三町

永穂中小を支散位藤原始の末葉起ハ栗樹村大楠丸の系ニシテ

神波 宇田虎尾良有ア神波ハ旧神戸也。倭名抄云諸ふ御名の中に神戸多リ。是皆其

御卷曰便別祭六十萬群神仍定天社國社及神地神戸曰垂仁帝御卷曰故弓矢及横刀納

諸神之社仍更定神北神戸也。かくられ附代よりて神戸の地と改教らべ。おうべ。

大屋都比賣神社 平田庄宇田 三月十六日四月廿日六月朔日九月廿一日

祭る神三座 中央 大屋都比賣命

御津姫命久石三神亦祐主布木檜脚奉波於紀伊國也。續日本紀曰文武天皇大宝二年己未分遷伊太祁

曾大屋都比賣御津比賣三神社三代守護曰貞觀元年三月廿七日奉授五位下大屋都比賣神後四位下云

楠塚境内の東御神御手洗御靈社

十五社の社あり。宇田八幡宮

宇田八幡宮 女和大田神云。若宮八幡社 金財天社 境内有

播磨八幡宮は廻故ふゆの名も木の國と云。元乃帝の御制小園御記の音

まづして大洲國中より多く海極ありて野山も山ふも青々と草木の茂

たる此御神の御功うり宮殿民屋まで材木と用ひて造ることあり。されば

大屋都御名ハ頗りアリとみて上下も崇敬也。はすて人皇十三代源川

天皇寛治二年四月越野三山へ御幸行せし。附當社も御奉幣行其後去

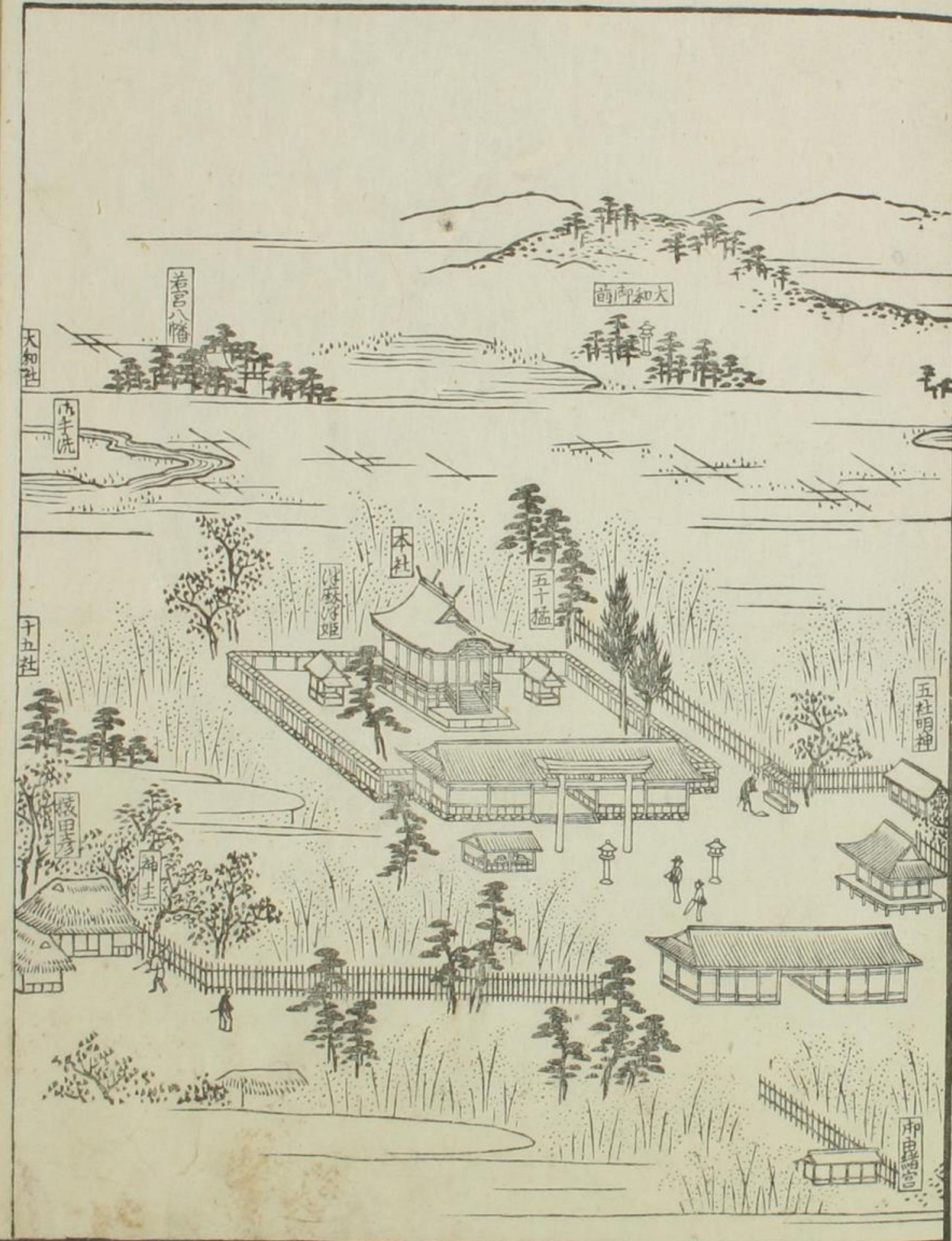
治元年神田十八丁社地五丁四面御寄附うせらひぬかにしより社門の御社嚴

きくびに末社下基く疊行役日巫祝の終の声淨にして耳と重ねて

夜もとめ。常燈の光煌にて眼と奪ふにも輪奂うる官居もしも應

永の大古の兵禍大凶罹アモ社殿残らず鳥有とう。僅お其十ガと名と云

當社の祝家忠氏ハ大屋彦よりお賣じて今に至て八十三代連綿アリ。妻の社家の



紀の川の涉

夜來風雨漲河

流欲渡津頭衆

扁舟試問仙槎

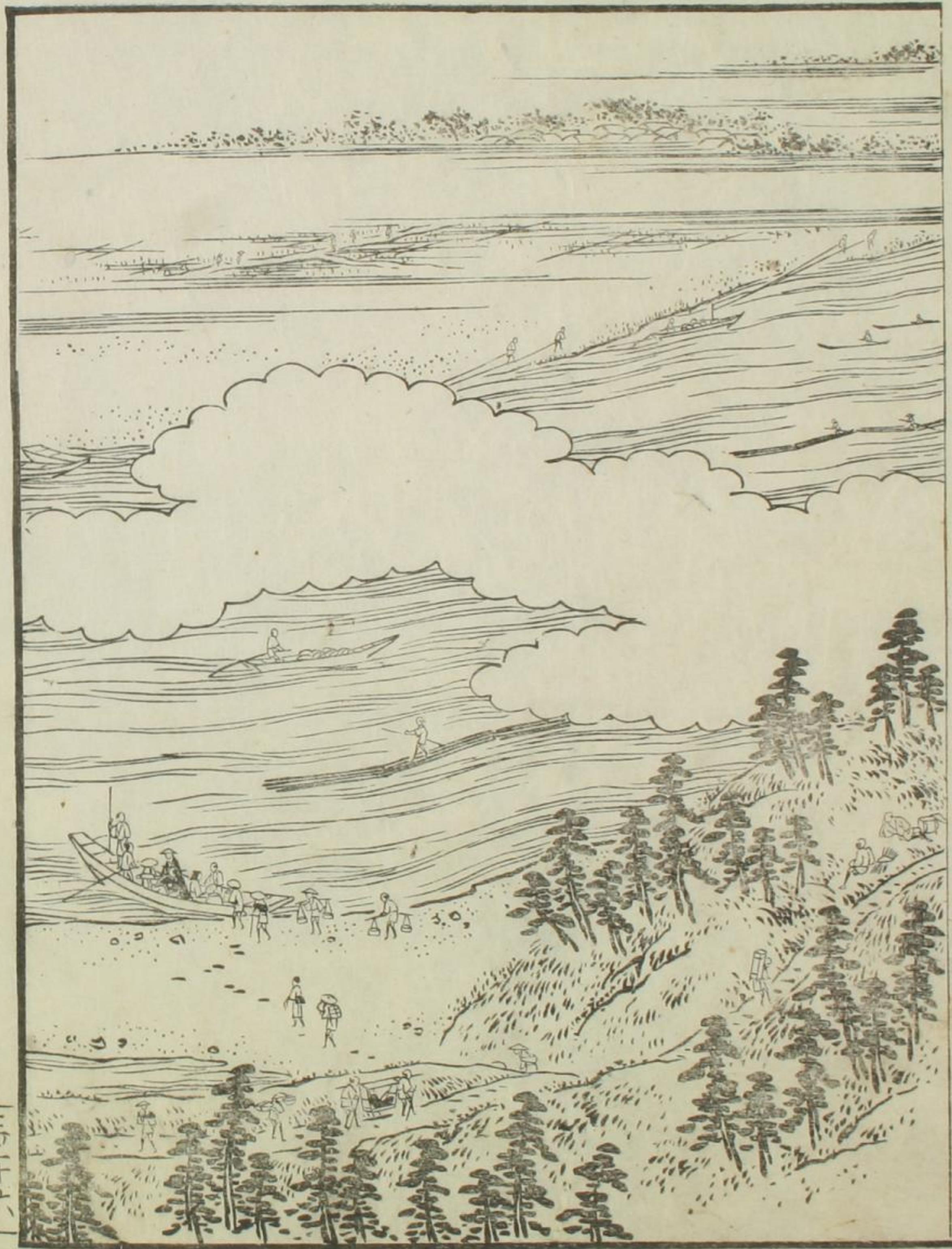
江上客南山幾

嶺花開不

紀藩

坂井清淵

塘里



支本

今朝うへりく風の水もあささうひ紀の川上に音うきさん 僧院御室

朝うへ紀の川上をみせかひのまみゆれたりけり 法橋院館

雪ふ集みの川をもるく

冰上をうのまけへ紀の川の浪のをふまたあるぬうう那 肉食美達

川をもくじひのうりて坐りとそくとく

日 あく雨をもくもくもくわく

章根集

あく雨をもくもくもくわく 梶衣きの川上りあるもくもくとく

千首 まのくも紀の川きの春のそよよじもあるくもく平う那 杜丹花

まのくも紀の川いいく歌もあう

たけうらあみゆくがや 三う乃眼

いと士の見うる中や 燕 翠の中

春日郊行渡紀川翠一首山嶺

鳴鶯 啼雨歌挿春心跨馬破霞追跡禽潭水

双葉山より躍長江喬山嶺偶登臨

田井執行左支教位中臣朝臣の末葉

星頑明神社 小豆島村 あり

多田碑池

其角

本筋

三十七

府中神社

八幡宮

八月十六日久祀あり

○神宮寺渡日山ね損寺

半身



三八十八

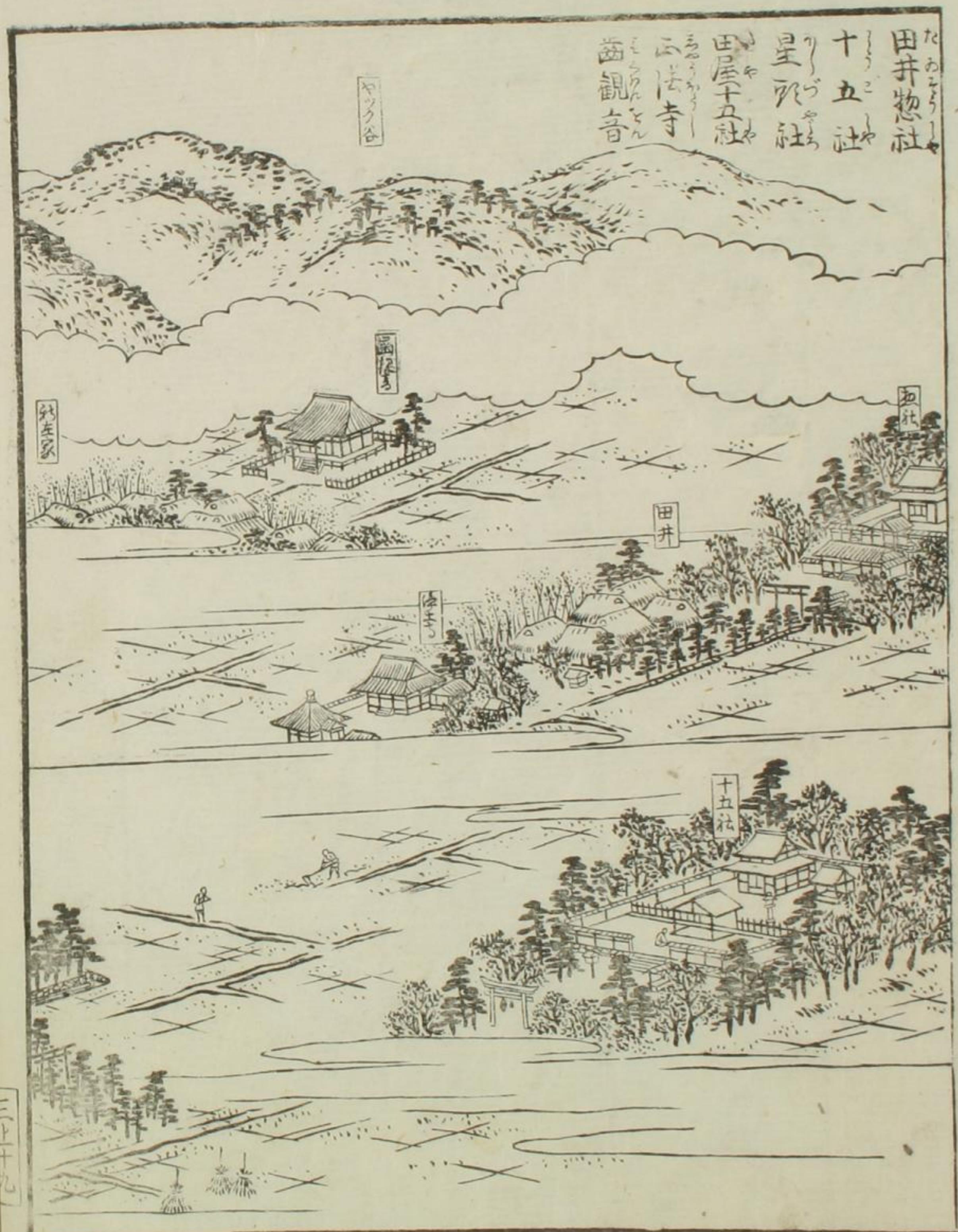
高良明神社
 歯観音
 梅松山三院寺
 圓上寺旧址
 右より
 十立弘明神
 田屋村より
 九月十七日
 おゆみやまの鳥居一村の産神なり
 日村にあり 千尋十一面觀世音菩薩
 さくらと日暮川村よりをさむ長年中せせらぎ
 すま

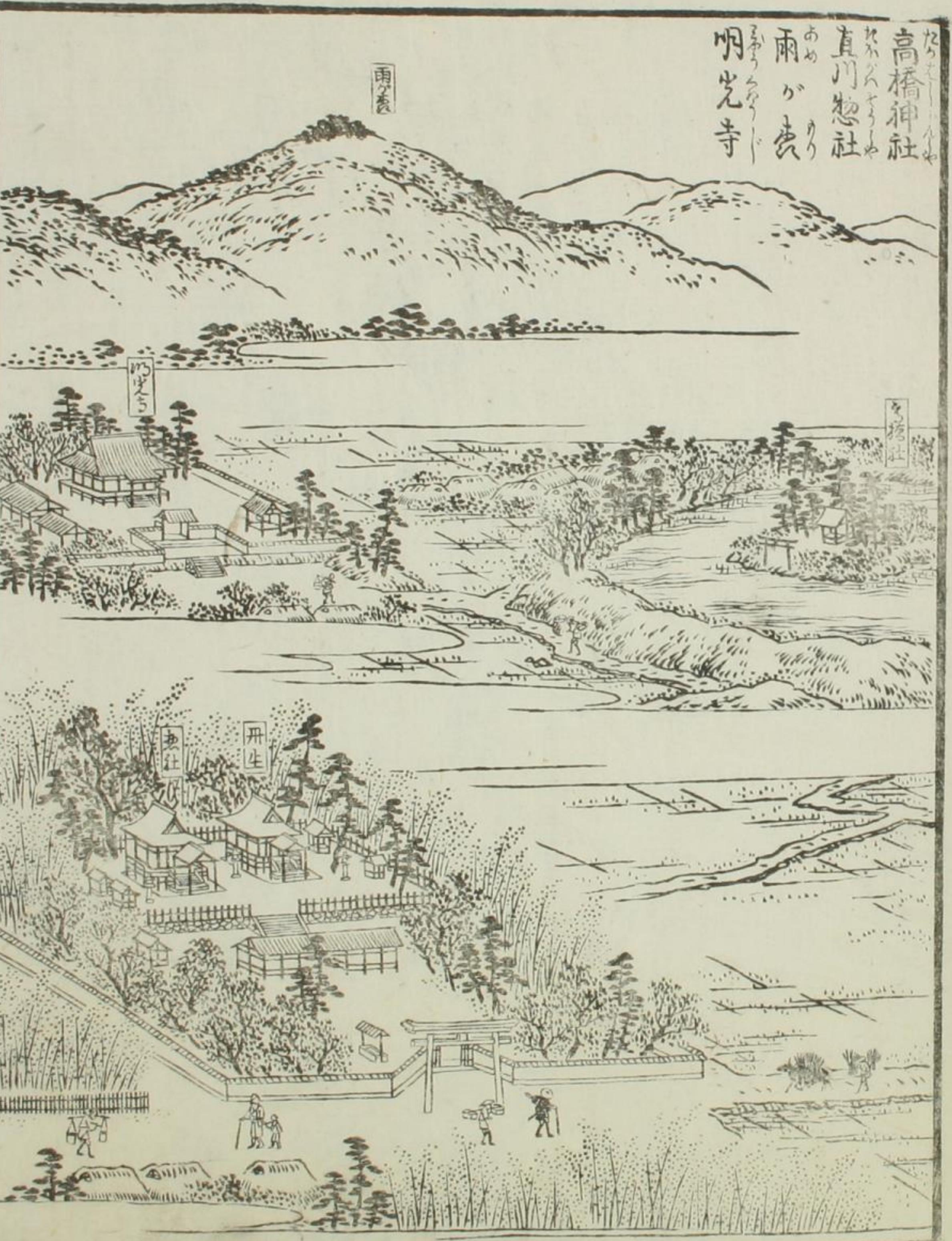
金く令でたるに宿とほく東方を曰卓もうちの御堂の光明神にて
 麻子の車とて駕を走る山下の御民大いに怖れてもじめて神威の裏端靈
 銀をかうと生うやてかくと御廳より下へて刺吏御地名こととて坐廻りといとせ船すよ
 銀く是れわちしき其地峻嶮とて基址どうよ敷すに號ようがくあはて
 山あるもれねとたどり堪蓋のく爲拍拂ふ托して盤石のくちもとの内平地のくろ
 あつくを移候の往來アソシテ御邊の水をすりて御邊のオヌマ園とくあはて、御邊のけぢ
 石の里とあらやまとは生水あつ全の川村の下流にこれりと
 は村の南山の
 おゆみやまの鳥居一村の産神なり
 すま

おゆみやまの鳥居一村の産神なり
 すま

田屋村より
 九月十七日
 おゆみやまの鳥居一村の産神なり
 すま

おゆみやまの鳥居一村の産神なり
 すま





田屋助を主散位忌部宿称木葉
高橋神社
雲山峯天明神
總社明神
丹生神社
照陽山明光寺
田村村あり奉る乃弥陀佛

田屋助を主散位忌部宿称木葉
 高橋神社
 雲山峯天明神
 總社明神
 丹生神社
 照陽山明光寺
 田村村あり奉る乃弥陀佛

田村農家なれば、田間署の土のにて、未だ
 稲種村に植えぬのである。
 ○里人をもむけ、生背垣内に、人代車ハ材より居候て、其事と組と記。うつとくや、今櫻
 又云高橋連二作あり。大鎌領金。小前省耕。既已布都が運。之れ、堀内の事と御りづるがあつて、
 この二家の内、あるか。
 本山の右側の中には食あり。又、高橋連二作あり。大鎌領金。小前省耕。既已布都が運。之れ、堀内の事と御りづるがあつて、
 桜の古れ塗りとて、所とちりよろくを延びて、そのぞひあこも、蛇骨の、くわゆ、櫻塗
 うどりて、横濱沿海の画船をもとつて、方角体をもとづく。又、天明神とおまつて、兩脇と今
 はうの地をもくらひ、櫻の、くわゆ、櫻の、くわゆ、櫻の、くわゆ、櫻の、くわゆ、
 人をもくらひ、西候とぞれ。さう、五輪塔。謂、鳴山。益敷山。戴帽の、くわゆ。
 日村一村の丸根、うて、毎歲九月十四日を祀。あり。此あり。場あり。そぞと、東と、西場と
 そぞ共む。の神事。さううて、他篇引の事もあつて、またの、後、うごくと

遍照山淨水寺

本門阿彌陀堂

大福山奉惠寺
西本堂千手觀世音
○開山堂
○鐘樓
○一王門
○見堂
○伽藍
○藥師堂
○極堂
○六所權現
○僧坊
○辨天社
○妙見堂
○千手千眼觀世音
大宝二年志願より後優婆塞自

一刀ニ三度の詣地にて御ま植武天皇青葉崇教の寺像されが延暦二十三年夏五月勅使をもて御漢経作成へ弘法姑草創の地に果トうち入奉以来五十餘町少すて辨天の窟
尊坐りて寺を千手と號コラニ舊本七丈壹尋の内寺ニ萬集童子
在大福山ト
感得の夢覺にて法弟計庵を上人
院主相伝迹參く御心也
元和五年二月十八日寂れ當御墓あり
本附令一
移して僧宗の御刹とし僧坊都三十有二舍諸堂壇堂とあへて魏城へ移りテ五山の兵少ふ離はく時ふ灰燼ともれり
家本慶長年间のゆうとよろひの隱士平塚城中守久賀ある人夢想の靈験ありて再興の檀越とあり資財と施て諸堂を造立終て大和平中日蓮ゆるの高徳日忠上人



三九二



直川寺惠

登大福山

杏門幾歲相尋尋
仙宇宗寥鎖夕陽
衆聲攢奉望不盡
滿林霜葉隨風飛

坂井清洲

遠
仙人道
かく
支考

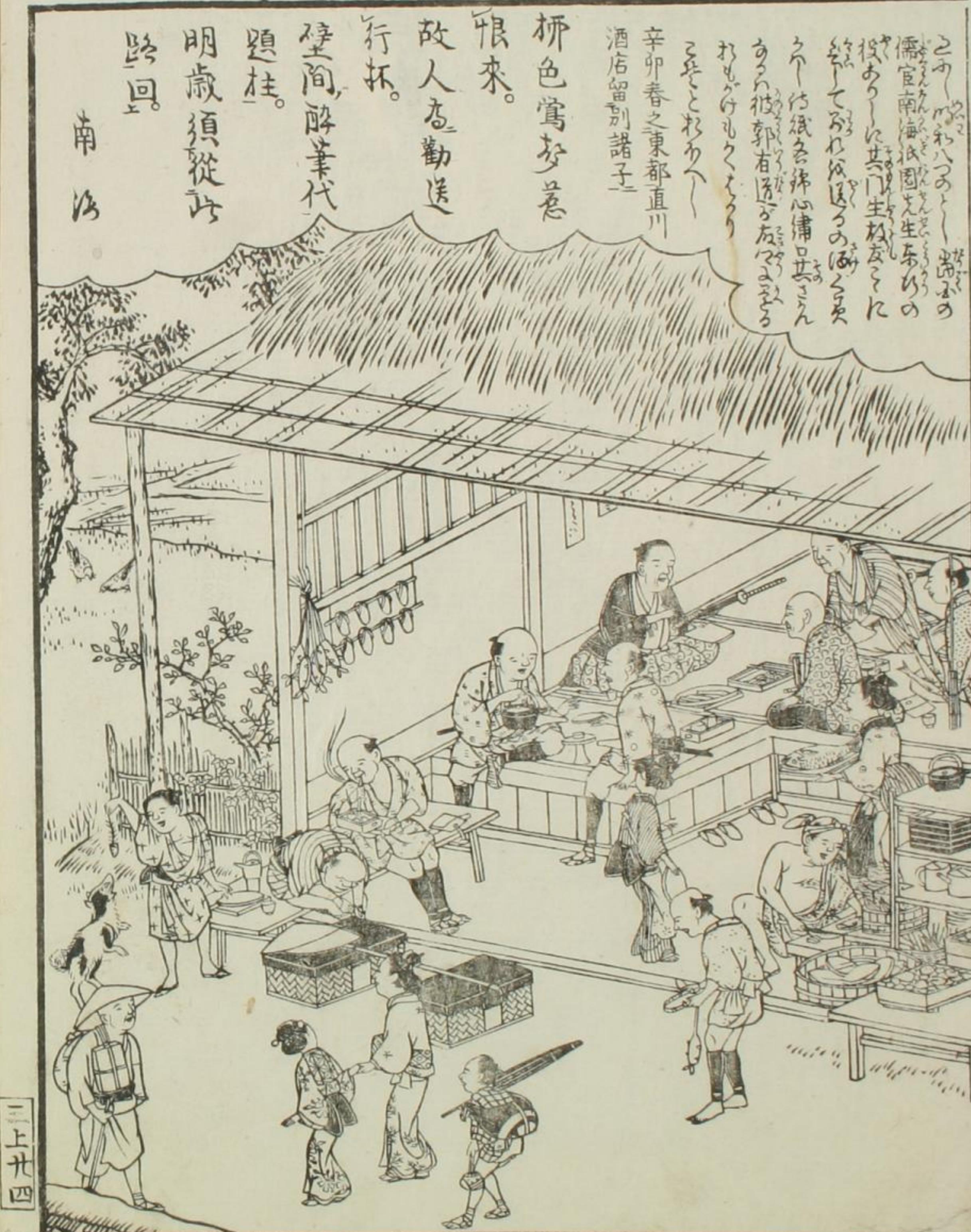
仙花



三上井三



千
 壽
 の
 原
 を
 活
 て
 中
 国
 の
 田
 祖
 と
 ち
 宅
 改
 て
 本
 恵
 寺
 と
 て
 優
 驚
 塞
 乃
 草
 鈞
 り
 加
 て
 こ
 そ
 て
 今
 脱
 ぬ
 過
 門
 の
 法
 師
 家
 と
 あ
 る
 ○
 什
 賓
 弘
 法
 大
 师
 と
 ひ
 跡
 乃
 阿
 宇
 ○
 大
 福
 山
 駐
 賊
 天
 之
 窟
 ○
 五
 十
 町
 よ
 あ
 り
 ○
 是
 又
 月
 一
 葛
 城
 の
 山
 中
 に
 て
 経
 験



谷のぢやうる山岳をもむかへた里巻遙よ庵よ峯立山あるく壇田
松風飄くとて毎朝の睡をとる一洞水溜くとて煩惱の熱と
洗つて大原よよろこむをもい是必に神仙の憑栖弘薩の靈區
かくべーとあだ興よ天奏を鐘く一宇と名創一新う赤梅檀
をりて医王菩薩の多像と彌勒とと安じて根中堂少て
帝敵感はうだつたに於く南魯の大同寺法華院の勅号とく
たまひもふ其は本唐院の圓仁阿闍梨大師の遺跡とまくらく
當山より人をひく佛閣粥よ造立一法界坐し大防真跡
の妙曲と納め三昧の妙絶意と多く多宝塔よ四堵の寶篋
伶倫の樂を奏一六楹の華幡衆人の袖翻ぐやうもつて是よ
絶くよ益え大師幽山よねゆ如法經伝傳くもく釋迦多寶
普賢善薩の多像と自刻一別院より御安一徒樹と樂く
六門の遷行ふ三會の曉をほ常寂堂よ弥陀尊像三昧の念

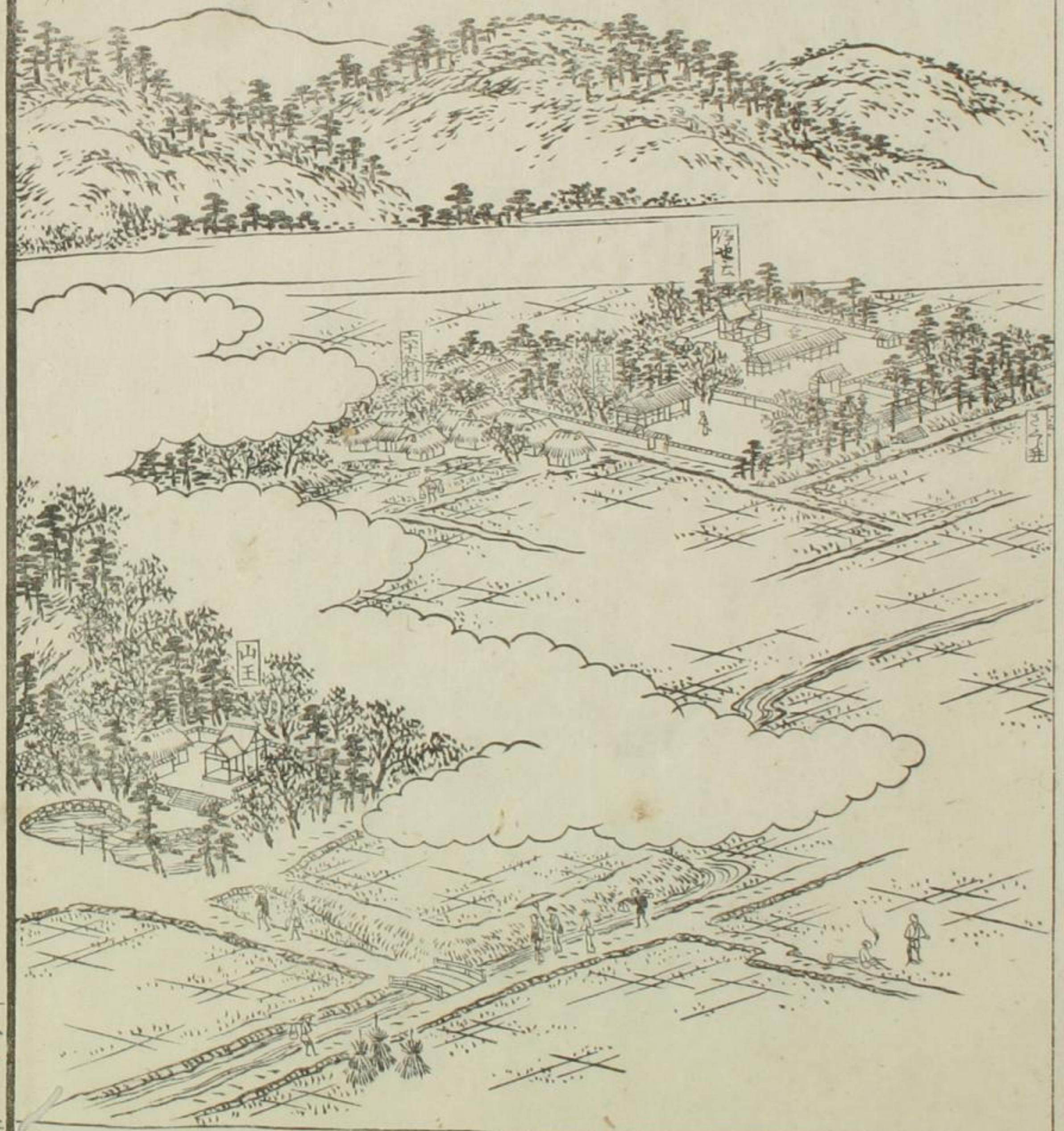
佛たゆうとてあ一 異神の社ハ伽藍の破壊をやうり山王の
令法久にとれひろく立室の大塔よ大日堂玉の安とて捺傷の
被法と候一 一切縫の輪藏よ圓教の告趣と悟るも妙見
堂矣玉堂と初と左方の峯にニ宗真言禪律の二院
起立一 お方の峯又自ら書寫の法再と收め經塲山と名付
たを更ふ寐光都立安養の二院が遠く興の慶と名す
ちうだ嵯峨涼和の兩帝はひく御帰依の處を深く弘仁
おとび天長の寺号ともい奉ふの二院と奉てらうに二つも
増立一 各根卒法并常寂の二院と役りく巍然たれ周
甍とうご若を一 美尼ワ一 痴歎よ都鄙の僧人絆とす
ね緬素湯作のあつさぬい雲母の一會微缺とてれホ教セ
ざるかといももとくからて家廟あまくじびにて後鳥羽院の
御宇然躬け幸のわく圓輿をめぐる一あひて堂塔再興の

射矢止社
櫻井

大同寺

初冬遊大
同寺呈前
法印應公

真際祥雲
蔭上方給
高堂林楓照
霜染錦成鄉
殘玉作秋山
連斗極江光
勢走空匣連
獨探靈不崇
崇岡逍遙遠
光曳練遠異
不獨探靈偏
興醉坐偏
欣裝妙杳



中洲



三十九八

大日寺什物天台大师之画像

靈山一會
天安然未散
地平匡正

佑友心也出處有寫て合ひ因はまき
首都大門身も之遣縫と說合
于時貞元廿年冬十月
義真法記

権佛之圖
堀了

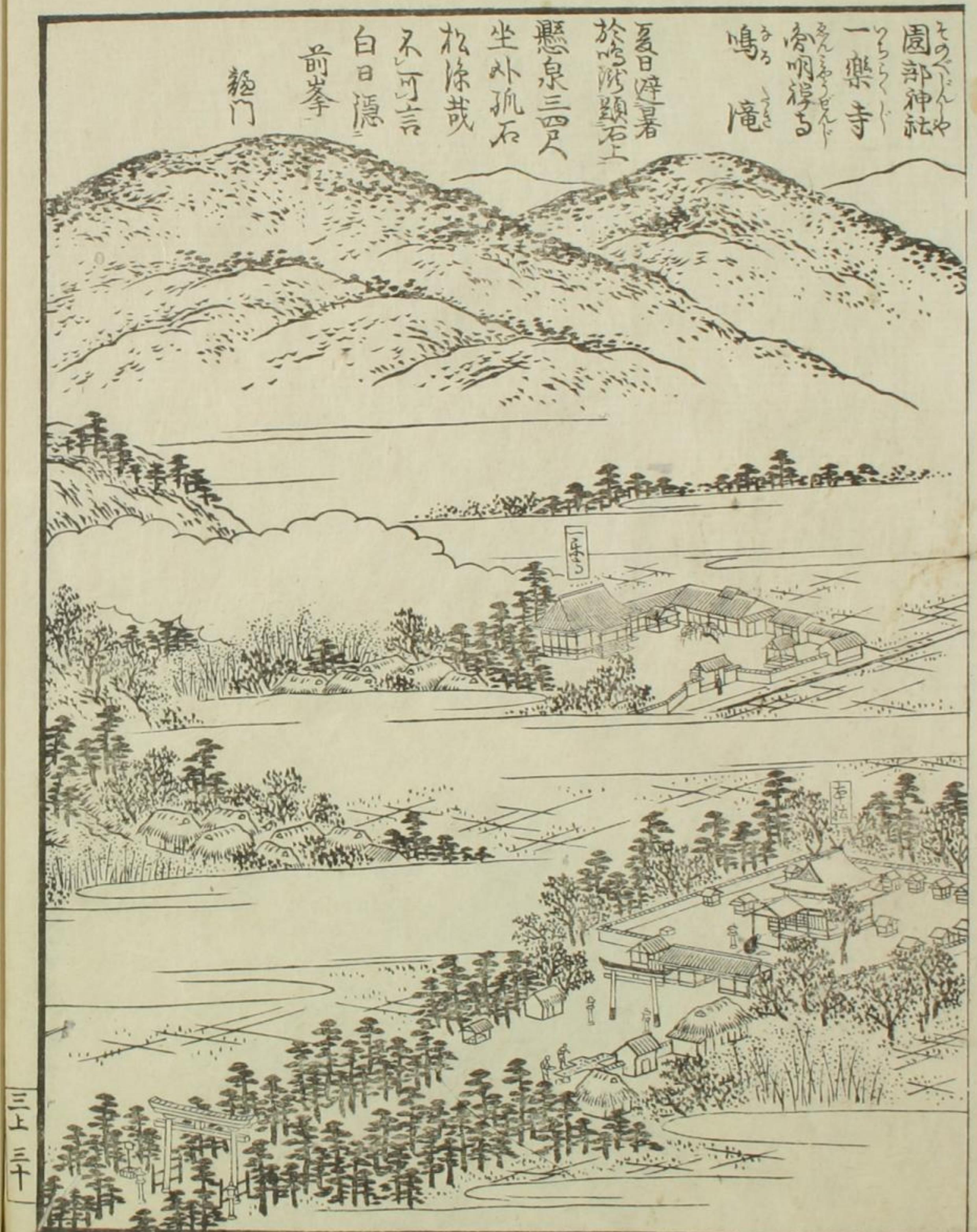


三上廿九

勅と下したまひ山よみ陵を薦せ玉へニ世の仰祈願す
のりけりとまび歴代勅願所とて止觀の密よハ念ふるの光
がえりとくらり両乳の床よニ密か持の眉長くかやた
万葉不退転の靈場たりーも天心の一炬に焦かとありし
と教どてもねむつあうと豆ども樂師の奉そば少中森
左さしくて今に靈渾あつたうりとも

園部神社

○編者曰余當玉造の次出御ゆるく一大息もととあり其心事回りて神社佛閣の古
曲籍にりくめ者へらそんがんあつてお体を終つての心事とぞくじも花衣
馬 saddleかとくに二所づれに坐すとて一條の御宿と接とくろとす御供伏籠
かわらぬて御威とすやう御前よろくきて四方とくろと周圍二十とくろ
の叢林とぞぐんやいり内面いあつて居さんと後日又御宿中な處頃の宿と
下の用事りとぞうとくまとのとおことく里人よとすおおあこまよけよく
涪江清流して寛ぐ田源俊撰の松濤詩よりひづくどもれとほへ



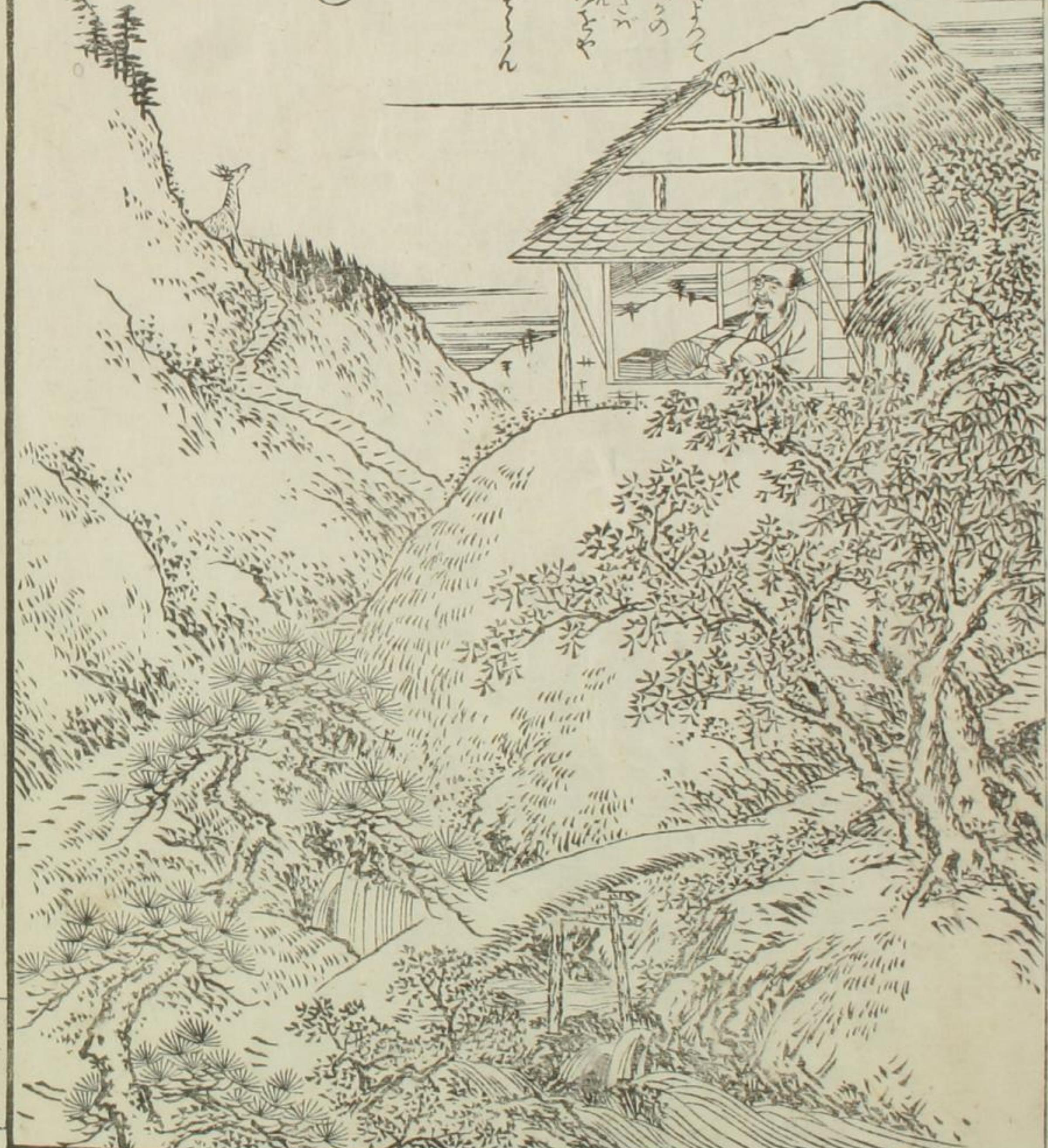
あくとをのいとおふくろもはなつこまつゆめうち
かみふうじうく祭月を経べ
かみをたどりえ程へまよいた世もねり 秋の服
かみをあらうふくろくわくやくせく書はゆく人のつひとまひ

延享庚八月記

小山老翁九十三歳

而澹已經處。驅魏後。今端幻漫沿西畿。
無如昇龍上。想之文。關抑七年者。鍾。望之南。其最
留。然山居。徒。其官。偶。此衣。蓋。爲。士草堂。
使絕。悲跡。徑。其。帶趾。大嶺。諸。爲。土。所。也。
猶。其。名。以。石。間。嶺。觀。巢。居。葛。
字策。偃。周。似。非。于。君。心。鳥。巣。居。葛。
苗林。朱。載。目。謂。心。則。鎮。其。非。于。君。心。鳥。巣。居。葛。
之丘。嘗。一。所。謂。心。則。鎮。其。非。于。君。心。鳥。巣。居。葛。
優。不。室。未。謂。并。與。非。于。君。心。鳥。巣。居。葛。
游。其。通。與。非。于。君。心。鳥。巣。居。葛。
林。無。聲。也。與。其。巖。居。室。利。其。高。無。箭。嶺。葛。
之感。石。足。居。室。利。其。高。無。箭。嶺。葛。
中。未。書。來。而。竊。川。而。觀。其。間。其。謂。雲。亦。森。立。南。
竟。不。參。蹕。其。高。而。竊。川。而。觀。其。間。其。謂。雲。亦。森。立。南。
與。筆。不。參。蹕。其。高。而。竊。川。而。觀。其。間。其。謂。雲。亦。森。立。南。
造。命。不。參。蹕。其。高。而。竊。川。而。觀。其。間。其。謂。雲。亦。森。立。南。
物。者。客。志。政。朝。世。利。念。人。土。吾。無。相。濟。者。是。當。是。當。是。當。
者。客。志。政。朝。世。利。念。人。土。吾。無。相。濟。者。是。當。是。當。是。當。
相。至。飲。匱。未。食。匱。未。食。匱。未。食。匱。未。食。匱。未。食。匱。未。食。匱。未。食。
終。不。斯。泉。終。不。斯。泉。終。不。斯。泉。終。不。斯。泉。終。不。斯。泉。終。不。斯。泉。

歌
鳴鶴山圓明禪寺
開祖がば堂。舍の子はもみまつひく其つや。をねり。色。
す。化。まじう。○辨財天。祠。金剛童子祠。諸堂。魏。かた
る。布。金。の。だ。す。し。天。云。の。丘。火。よ。羅。ほ。く。焦。土。く。か。の。益。共。
な。村。の。小。六。所。あり。○不動。神。法。山。室。次。木。尚。禪。那。と。あ。す。
の。ひ。○
宿。弟。三。の。行。不。あ。う。翠。巒。雀。嵬。と。て。元。泉。り。白。虹。



雲々空分ちく寫

支
那
の
國
の
事
業
の
あ
ら
か
ず
の
あ
ま
れ
い
た
れ
の
よ
う
に
は
さ
く
て
け
つ
れ
を
辛
大
式
を
至

方ありて
右翁はいまくよ 真眼
まほりをやうりあゆまへ

富天



伊久姫吉

新著_ニ清明_、雨_ヲ
幽芳_ヲ發_テ滿_ツ枝_。
無花_レ應_レ誤_ル柳_。
多繙_亦非_ス綠_。
露重_レ憐_レ紅_ヲ濕_。
風徐_ニ見_レ影_ヲ垂_。
一春_ニ慵_レ似_リ我_。
少_リ有_レ起來_ハ時_。

碩
夫

伊勢
那
古

其小謂鶴鳴也。遊龍在故府詩序曰：「吾師司龍在紀清名，城之幽名也。」聞鶴之北，勝寂其地也。丘里蓋葛嶺之區，別云此其遙有山本，而大中惟出塵之暴。謂國有俗是也。

海部あまべ

九頭大明

一村の産神にて例を毎年九月十四日○境内銀杏樹旁
希代の古樹あり幹の太さ二圍以上葉繁茂しき
ごく小瘤の生れたもの生じて長く下り垂たり其最長

御文毎年九月十四

草の木と山腹によ
くものを生じて長
き

四日○境内の銀杏樹脇

新代のアザミ草の木と、
ごく瘤クモのやくらみを生キナガじて、
長タケ

四日○境内の銀杏樹脇

おとすの五尺余にてぐらんとく研棒銀杏さんきいとうとく一奇
觀えんとくへも

群芳譜曰。崑山縣志云。龍井猗。汴人殿中侍御史。扈從高宗南渡。道經崑山。真義折銀杏一株。插地祝曰。若此枝得活。吾於是居其枝長茂。後成大樹。繁枝蟠屈。臃腫如癭。如乳者凡七十餘顆。相傳為其子孫嗣世之數。時人異之。稱為龔遇仙樹。子孫遂為崑山人。云故市小游村

佐々比賣神社

市小游村

祀まつる神

詳くわうかく

佐々比賣神名帳

佐々比賣神社

奉玉神

一村の生太神いそたじんにて例たとひを毎歲九月廿三日にて生太太平宝字八
年里城役さむらぢやくの内うち藤原貞圓とうげん ていわんの家いえにて遣しりぞく心こころの後のち神告みことのこゑによくせ代だいも賽さい幣へいとく美うつくし恒つね例たとひとある。

九頭神社

藤原村

一村の產神うぶじんにて例たとひを毎歲九月十二日

内うち村むらにあり。社内うち藤原貞圓とうげん ていわんの家いえあり。幹幹牛うしもく丈じょう也よ。而がて二圍ふたまいにも達たつ。また蔓條まんじょうもびこりて例たとひの新樹しんじゆトモシキウラスの庭ばは更またより上う段だんとある。希き世よの古樹こじゆうち内うち藤原貞圓とうげん ていわんの家いえもあり。而がて社しゃ立たて堂どうの守まつ代しろにておぞおぞくつゝて世よの家いえの氏うじとある。藤原貞圓とうげん ていわんの子こ孫まごのぞまやかなしき拂はらはら拂はらはらりて入いる所ところをかればぞふそち

休言きゅうごん間ま色いろ賤せん可こ貴殿き餘よ春はる况なま復か長なが松まつ上う根ね得とく所ところ親おやぢ垂たれ縷る欲ほ

祖南海

灌水向熟來依人正是朱明節檀場別麗辰。

